

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～「山の・・・郵便配達」～

人ひとりがやっと通れる山道をひたすら歩く親子。3日かけて120キロの道を行く。

その途中にある村々に立ち寄り、郵便物を集配する。中国湖北省の山岳地帯を舞台にした映画です。

交通手段がない山村で、長年郵便配達をしてきた初老の男がついに力の限界を感じる。

そして息子が父の仕事を引き継ぐことになる。

父親にとっては最後の仕事。息子にとっては最初の仕事となる2泊3日の旅が始まった。



愛犬の「次男坊」もこの2人と同行する。今まで父といっしょだったが、これからは息子と行動をともにすることになる。

息子は、郵便物がぎっしり入った重いリュックを背負う。そのあとを無言でついていく父。長い間、父は仕事のためにほとんど家にいなかった。

そのせいで父子の絆は薄く、息子は父親を「お父さん」と呼んだことがなかった。ただ黙々と歩く。

ある村に着いた。

全盲の老婆に軍隊に行った孫からの手紙を渡す。

老婆はお金を包んでいた白い紙を渡し

「手紙を読んでくれ。」と頼む。父は読み上げる・・・

「おばあさん、目はどうですか？腰の具合はどうですか？

こちらは元気です。なかなか帰れないので困ったことがあったら郵便配達の人にたのんでください。」

老婆は言う。・・・「いつも同じだな。」・・・父は息子に手紙を渡して「続きはお前が読め。」と言う。

息子が見る・・・白紙だった。

息子は戸惑いながら何も書いていない紙を見て・・・

「一人暮らしは大変だね。よければ一緒に住みましょう・・・」と続けた。

老婆と別れた後、息子は「ああやって何年も父はあの老婆に白紙の手紙を読んであげてきたんだ。そしてこれからは俺が読んであげなきゃいけないんだ」と考える。そしてまた思う、「外の出た者は家を思う余裕はないが、家にいる者は外の家族を思うんだ。」息子は老婆の手を握った時、母を想った。

川があった。橋はない。息子は膝まで浸かって向こう岸に渡り、リュックを下ろし、また戻ってきて父を背負い川を渡る。

父は、息子に背負われながら、息子が小さかった頃、息子を肩車して祭りに行った日のことを思い出し、あふれてくる涙を必死で堪えた。

息子は、この冷たい川で父は膝を痛めたことを知る。そして、背負った父親が郵便物より軽いことを知る。

2泊3日の旅は、父の生き様そのものだった。自分の知らない父親の人生があった。

心に大きな隔たりのあった父と子は次第に心を通わせていく。

(日本一心を揺るがす新聞の社説/水谷 もりひと/ごま書房新社)



コストダウン、IT化、デジタル化、そして・・・AI化など合理化は避けられない時代です。

でも、どんなに状況が変わっても・・・どんな仕事も・・・原点は・・・自分を相手と置き換えて・・・

「心を込めて仕事する」・・・これなんです。